

日中両言語における擬音語の対照研究

韓紀星(カン・キセイ)

はじめに

日本語を勉強するために、日本のテレビ、本、新聞等を見ると、擬音語と擬態語が頻繁に使われていることに気づいた。特に、日本人と話している時に、擬音語と擬態語、いわゆるオノマトペが多く用いられることに気がついた。それが日本語の特色の一つであると言われていたが、我々外国人の日本語学習者にとっては、理解しにくいところになっている。しかし、日本人ともっと自然な会話をできるようになるために、オノマトペを大量に覚える必要がある。

そして、日中両国語のオノマトペに関する先行研究を読んだとき、中国語にはオノマトペの概念は、擬音語と擬態語の総称ではなく、“象声词”（「象声詞」）（以下、“”を外す）、いわゆる擬音語と呼ばれることに気付いた。さらに調べると、中国語の擬態語が少ないことも分かった。

そして、日本人作家が書いた小説とその中国語訳とを比較して、日本語と中国語の違いについて考えた。そこで私が気づいたのは、日本語の小説に擬音語が多いが、中国語訳の方ではほとんど訳出されていない、という点である。又、動物の鳴き声も、日中両言語で異なる発音の擬音語が沢山ある。なぜ日中両言語の擬音語にこんなに大きな違いがあるのかという問題について、研究したいと思っている。

本論は、以下の問題から論じたい：

1. 徐一平と野口宗親の先行研究を参考にして、日中両言語の擬音語の概念と特徴について整理し、なぜ同じものに対する異なる擬音語が出てくるのかという問題を明らかにしたい。また、擬音語の発音と意味のつながりを考えたい。
2. 赤川次郎の「ところにより、雨」と「幽霊列車」を参考にして、日本語の擬音語がどのように中国語に翻訳されるかを整理する。そして、また、中国語の擬音語の数量が少ない原因について考えたい。
3. 中国人の日本語学習者を対象として、擬音語の学習の現況について、アンケートを行い、学習者が日中擬音語の差異について、どれだけ理解しているかを知りたい。また、学習上の問題点を明らかにする。

本論文では上記の三つの目的を明らかにすべく考察を進めていくが、主に瀬戸口律子（1982）、野口宗親（1995）、趙寅秋（2013）、徐一平（1983）の先行研究を振り返りながら、問題点を提出し論述する。

この研究を通じて、日中両語の擬音語の異同を明らかにするとともに、対照研究の方法

について学び、これからの勉強に役に立てたいと思う。

本論

1. 擬音語の概念

1.1. 先行研究

日本語の特色の一つにオノマトペがあり、数、形態共に豊富であると言われている。擬音語はその一部分として、通常次のように説明される。

擬音語とは、人間の笑い声、泣き声、つばを吐いたり、ものを飲んだり、平手ではたたいたりする時などに発する音、人間以外の生物の発する声や音、また、自然界に自然に発する音響や、無生物が、いわば自然に、あるいは、外力の作用を受けて発する音響を音声で表現した言葉である。

（『擬音語・擬態語辞典』天沼寧編 1974：7）

それに対し、中国語の擬音語について、通常次のように説明される。

擬音語（狭義の擬声語）は外界の音や声をまねて、言語的に再生したものである。…（中略）…中国語で擬音語に当たる語は“象声詞”（「象声詞」）または“拟声词”（「擬声詞」）物音——^{ドン}咚（太鼓）^{フーフー}呼呼（風の音など）^{ピバ}噼啪（爆竹の音）”である。中国語の象声詞は一般的に次のようなものをいう。

① 動物の声——^{モウ}哞（牛の声）^{ワンワン}汪汪（犬の声）^{ジュウジュウ}啾 啾（小鳥や虫の声）

② 人間の発する言語以外の声や音——^{ハーハー}哈哈（笑い声）^{ア チ}阿嚏（くしゃみの声）^{ジ グ}唧咕（小声で話す）

（『中国語擬音語辞典』野口宗親著 1995：8）

1.2. まとめ

上記の概念から見れば、擬音語というものは、聞こえる音や声を一般化したものだと考えられる。また、日中両国語における擬音語に対する定義は共通点があると思う。

しかし、日本語と中国語の中で、同じものに対しても、時々発音が違う擬音語を表現する。例えば、猫の鳴き声は日本語で「にゃーにゃー」、中国語で「みゃおーみゃおー」という。これについて、野口宗親（1995:8）は以下のように述べている。

（前略）対象となる音響（意味）と記号化された語音との間に、ある種のつながり、すなわち音象徴が存在すると考えられる。…（中略）…ただし、つながりとは言っても、声帯模写のようなものではなく、それぞれの言語の中で、その体系に合うよう慣習化されている。

つまり、その違いの原因は、恐らく民族習慣や歴史などと思う。そして、日中両国語の構造の違いも原因の一つだと考える。中国語は日本語のような、平仮名や片仮名で直接に音を表す言語ではなく、漢字の一つ一つが意味を持っている文字であり、部首を持っている意味を無視し漢字を使えなければならない。音や声を真似る擬音語でも、その音や声、また形や意に近い漢字を選び、擬音語になるわけである。だから、中国語にない発音は、擬音語になれないのは当然だが、その上、形と意味の制限があり、選ばれる漢字がより少ない。また、擬音語として使っている多くの漢字は、もっぱら擬音語で使う漢字である。言い換えれば、中国語の擬音語は、音と声と形により、適当な漢字を選び、ぴったりの漢字がなれば、新しい漢字を作る言語である。ところが、日本語の擬音語は聞こえた音や声のまま擬音語を造るわけであり、より自由度が高く、数量も多い。

2. 擬音語の形態と特徴

2.1. 先行研究

日本語の擬音語の形態構造について、徐一平(1981: 16-18)は次のように述べている。

1) 単音節と非重複型(長音を含む)

- ① A っ式: うっ(と)、びゅっ(と)
- ② Aーっ式: さーっ(と)、ふーっ(と)
- ③ A ん式: ガン、ドン
- ④ Aーん式: あーん、だーん
- ⑤ AB っ式: がさっ(と)、ぼたっ(と)
- ⑥ AB ん式: ちゃりん、どかん
- ⑦ ABーん式: うおーん、うわーん
- ⑧ AB リ式: からり、ぽかり
- ⑨ ABCD 式: かさこそ、がたびし

2) 重複型

- ⑩ AA っ式: くくっ(と)
- ⑪ A っ A っ式: かつかつ、ふっふっ
- ⑫ AーAー式: かーかー、ちゅーちゅー
- ⑬ A ん A ん式: どんどん、りんりん
- ⑭ ABAB 式: ごそごそ、ぱたぱた
- ⑮ A っ BA っ B 式: しゅっぽしゅっぽ
- ⑯ AB ん AB ん式: からんからん
- ⑰ A っ B ん A っ B ん式: かつちんかつちん
- ⑱ ABCB 式: ちくたく、どたばた

3) 特殊型

はた、こけこっこー、ちんちろりん など

また、日本語における擬音語の特徴については、直接に音や声を表せ、文章を生き生きとさせる以外に、動詞と形容詞を補助する存在にもなると言われる。

一方、中国語の擬音語の形態について、野口宗親（1995： 10－12）は次のように分類している。

1) 語の構成要素が一音節のもの

- ① A 型：^{ドン}咚、^{ファ}哗、^{パー}啪

2) 語の構成要素が二音節のもの

- ② AA 型：^{ジ ジ}唧唧、^{ワンワン}汪汪、^{ウーウー}呜呜

- ③ AB 型：^{パーダー}啪嗒、^{ディンダン}叮当、^{ホンロン}轰隆

3) 語の構成要素が三音節のもの

- ④ ABB 型：^{ダンランラン}当啷啷、^{グールールー}咕噜噜、^{ファラーラー}哗啦啦

- ⑤ AAB 型：^{ドンドンチャン}咚咚锵、^{ディディダー}嘀嘀哒

4) 語の構成要素が四音節のもの

- ⑥ AABB 型：^{ディディダーダー}滴滴答答、^{ピンピンボンボン}乒乒乓乓

- ⑦ ABAB 型：^{フル フル}呼噜呼噜、^{ケンチャーケンチャー}吭哧吭哧

- ⑧ ABCD 型：^{ディンリンダンラン}叮呤当啷、^{シー リ ファラー}稀里哗啦

- ⑨ ABAC 型：^{ワーリーワーラー}哇哩哇啦

- ⑩ ABCB 型：^{ピーダーパーダー}劈嗒啪嗒

中国語における擬音語の特徴について、瀬戸口律子（1984）は象声詞の“^{ディダ}滴答”が“屋顶的雪化了，滴答着水（屋根の雪がとけてぽたぽたと垂れている。）”というように、動詞の役割をすると述べている。また、象声詞の音韻について、瀬戸口（1984）では、「象声詞はほとんどが第一声となるが、動詞の役割を果たす場合には、第二音節が轻声に転化する」と指摘し、音韻から擬音語の役割も分かると思う。

2.2. まとめ

上記のように、擬音語の形態について、どちらでも音節によって分けられる。日本語の場合は、「うっ」のように「っ」（促音）を伴ったり、「ガン」のように「ん」（撥音）を伴ったり、また、「あーん」のように「ー」（長母音）を含んでいたりといった点が特徴である。一方、中国語では、撥音が存在しているが、日本語のように自由に組み合わせることがないから、形態の一つとして分類していない。そして、どちらの言語でも、最も一般的な形態は重複形であることだと分かった。反復形が多い理由は、田守育啓（2002：78）は以下のように述べている：

一般的な言葉と比較してみるとよく分かる。一般語彙の例として「机」という言葉を考えてみよう。「机」という語によって指示されるものを、なぜ私たちは「机」と呼んでいるのだろう。それは、単に決め事として慣習的にそう呼ばれるようになったに過ぎず、何も「机」と呼ばなければならない必然性はないのである。つまり、普通の一般的な言葉の場合、語の形態と語の意味との関係は、必然的なものではなく、単なる偶然に過ぎない。…（中略）…そして、オノマトペが描写する音や動作には、一度限りのものと連続ないし繰り返しものがある。このうち、連続した繰り返しの音や動作をあらわすのに反復形が利用されているのである。

上記のとおり、擬音語が反復形を利用し、一般語彙より理解しやすい特徴もある。そして、中国語以外に、広島大学に留学しているアジアの留学生に尋ねると、以下のようなことが分かった。

タイ語：ซาร่า (「サーサー」 小雨が降っている)

ベトナム語：chang chang (「ちゃんちゃん」 日差しが強い)

インドネシア語：guk guk (犬の鳴き声)

これを見ると、擬音語が反復形を利用するのは、日本語だけではなく、様々な言語に共通の普遍的な現象だと分かる。

3. 発音と意味のつながり

擬音語は、基本的には言語音を利用し、現実の音、声、動作などを模倣して作られたことばなので、普通のことばと違い、音と意味の関係はより密接である。

3. 1. 先行研究

日本語音韻の音象徴については、今まで多くの研究がなされている。本研究は、丹野（2005）の研究に基づいて、日本語の擬音語の発音と意味のつながりを明らかにする。

まず、母音の違いによる丹野（2005）の研究方法は、大学生 72 人を対象として、平仮名で書いた五十音をランダムに配列しプリントし、被験者に配布した。そして、次のような教示を与えた。「日本語の音韻について、その音を見たり、聞いたりした時、どんな感じをもつかを調べます。ことばでそれらの性状（感じ）を表現して下さい」で実施した。各音別に性状表現の頻度を調べた。母音を音素とした場合、性状表現の多い方から順に第五位までとした。結果は下表のように表示している：

■表 1 母音を音素とした場合の性状表現語（五位まで）

順位 音韻	1	2	3	4	5
あ	明るい	軽い	うるさい	広い	かたい
い	痛い	静かな	うるさい	かわいい	かたい
う	苦しい	軽い	痛い	涼しい	おかしい
え	汚い	苦しい	軽い	重い	嫌いな
お	重い	軽い	寒い	怖い	丸い

この性状表現の結果を主観的ではあるが、キーワード的に考察を加える。結果と用例を下記のように整理している：

「あ」は、開放された明るさの感じである。

例：世界じゅうに一本も電柱がなくなるといのはどんなにさばさばしたことでしょうね。（太宰治『彼は昔の彼ならず』）

「い」は、締め付けられた小さなもの。

例：うちの子ねこは かわいい子ねこ くびのすずを ちりちりならし（唱歌「うちの子ねこ」）

「う」は、苦しさの中のもどかしさ（注：焦っている）である。

例：どんな気分のくさくさする時でも、そこに明るい気持の持ち方を発見する。（徳田秋声『縮図』）

「え」は、汚くて重い感じである。

例：でっぷり太った小柄なおじさん（群ようこ『満員電車に乗る日』）

「お」は、重くて丸さなどを感じてである。

例：（石を池の）真中へなげる。ぽかんと幽かに音がした。（夏目漱石『草枕』）と表現しているようだ。

そして、日本語の擬音語の中の無声摩擦音（はらはらなど）、有声破裂音（ばらばらなど）、無声破裂音（ぱらぱらなど）三つの種類について、特徴を調べる。日本語の、

- ① 清音
- ② 濁音
- ③ 半濁音

に焦点をおき、音の印象を捉えようとしたものである。

① 清音－無声摩擦音の語は、中立的である。

例：息がはーはーして体がだるくてたまらなくなりました。(宮沢賢治『グスコーブドリの伝記』)

② 濁音－有声破裂音は、湿気、重い感じである。

例：枯れ木がバキバキと音を立てる。

③ 半濁音－乾燥、軽さ、を感じさせる。

例：ぱかぱかと馬を鳴らしてはいって行った。(宮沢賢治『北守将軍と三人兄弟の医者』)

その他に、表2のような概括もある。

■表2

	清音	濁音	半濁音
音・声	澄む かすか 穏やか	濁る 強い	鋭い 愛らしい
運動の状態	弱い 静か 滑らか	強い 荒い 渋る	鋭い 弾力的
運動主体	小さい 薄い 柔らかい 優しい 少量	大きい 厚い かたい 頑丈 多量	軽い 小さい 愛らしい 少量
成立している状態	好ましい 滑らか 渋い 緊密	強烈 濃い 重苦しい 堅牢	刺激的 愛らしい

と表現している。

一方、中国語の場合は、擬音語の発音と意味のつながりに関する研究が少ないが、呉川（2005）に基づいて、まとめる。

まず、中国語の声調が特徴の一つであり、擬音語には、古典語からきた定型のものは、大体もとの感じの声調どおりに発音する。しかし、口語で用いる「非定型」のものは、その当て字のもとの発音の如何を問わず、第一声で発音する。また、“咕嘟” “^{グデゥ}” “^{グル}” “^{グアジ}” などのようなAB型2音節語は、Bの音節を「軽声」に発音すると動詞になるものがある。例えば、“咕嘟 gūdu” なら、「ぐらぐら」や「ぐつぐつ」など液体の沸騰する音を表すが、“咕嘟 gūdu” に発音すると、「長い間煮る、煮込む」の意味になる。つまり、声調により意味が違う場合もある。

そして、声母と韻母の音の違いを利用して異なる対象の音を表現するような対応関係が観察される。

[声母]

1) “z” “c” “ch” “sh” などの音を用いて、“兹 zī” “刺 cī” “嗤 chī” “欸 chuā” “刷 shuā” “沙 shā” のような摩擦音を表すものが多い。例えば：

兹 zī

自行车带～的一声放了气。

自転車のタイヤはしゅうつと空気が抜けてしまった。

沙 shā

在雪地上～地走。

雪の上をさくさくと歩く。

2) “b” や “p” の音を用いて、“叭 bā” “啪 pā” “乓 pāng” “砰 pēng” など、物が打ち当たったりして出す音や、爆発音などを表すことが多い。例えば：

乓 pāng

～的一声枪响，把我惊醒了。

ばんという銃声で目が覚めた。

砰 pēng

把门～的一声关上了。

ドアをばたんと閉めた。

[韻母]

以下のように、ng 型鼻母音の響きの違いを利用して異なる音を表現することが多い。主なものについて、次のようにまとめて紹介しておく。

1) “ang” “当 dāng” “啞 tāng” “咣当 guāngdāng” “哐啷 kuānglāng” など、わりに大きい音や金属音を表すことが多い。

2) “ing” “丁零 dīnglíng” “嘀铃铃 dīlínglíng”

3) “ong” “eng” “咚 dōng” “嘣 bēng” “噎 dēng” “嗡 wēng” “咯噎 gēdēng” “咕咚 gūdōng” など、より大きい音の響きを表すことが多い。

4) “a” は、などのように、よく破裂音や打ち当たる音などに用いる。

3.2. まとめ

先行研究から見ると、日中両言語の擬音語の音節構造はきわめて類似している。天沼寧（1984）は母音について、『擬音語・擬態語辞典』に掲載されている擬音語を「各行」ごとに頻度を取り、表3のように整理している（数字は%で表す）。

■ 表3

あ	い	う	え	お
19.88	27.04	23.75	6.13	23.17

つまり、開音節の単母音の a, o, e, i, u, ü で終わるのが圧倒的多数を占め、複母音で終わるのはほとんど動物の鳴き声などを表すときのみである。ほかに、ng 型鼻母音で終わるのも多いが、いずれにせよ、「開音節が多い」というのは日本語の音節構造の特徴と一致している。

4. 文学作品の擬音語

本研究は、赤川次郎の小説「ところにより、雨」と「幽霊列車」の日本語原文と中

国語訳を対照研究し、日本語の擬音語がどのように中国語に翻訳されるかを整理する。そして、擬音語は文章の中でどんな成分になるのかと明らかにする。また、中国語の擬音語の数量が少ない原因が明らかにしたい。検討方法は、王湘榕（2012）の研究を参考し、研究した。

4.1. 用例検討

赤川次郎の「ところにより、雨」と「幽霊列車」の日本語原文から擬音語を使っている文章と中国語訳に基づき、該当するものは47例見られた。この47例の形態を表4にまとめる。

■表4

AA っ/A っ /AB っ	A ん/AB ん /AB リ	A っ A っ/AーAー /A ん A ん	ABAB/A っ BA っ B/AB ん AB ん	ABCB	特殊 型	各 計
21	7	1	16	1	1	47

上表から、AA っ/A っ/AB っ型（きやっと、ワッと等）は全体の半分ぐらい（44.7%）を占めていることが分かる。一方、ABAB/A っ BA っ B/AB ん AB ん型（にやにや、ドタドタ等）は全体の三割（34.1%）を占めていることが分かる。

なお、以上の割合から、日本語の擬音語では、単音節（瞬間的な音）と偶数の音節が反復する形で音を表す傾向が見られた。次に、中国語訳との対応関係を見てみる。

■表5

順番	品詞	中国語訳
a	象声詞	17
b	副詞	9
c	形容詞	7
d	動詞	6
e	慣用句	2
f	脱訳	6
	合計	47

上表から、象声詞に訳されている例が各品詞の中で一番多く、全体の四割弱を占めていることが分かる。そして、副詞が各品詞の中で二番目に多くを占めていることが分かる。また、脱訳という対応も結構占めている。脱訳の定義について、先行研究では明確にされていないが、徐一平（2010：37）では、以下の用例を脱訳例だとしている。

- 安田はそう言いながら、せかせかと勘定を払いに歩いた。（松本清張、『点と線』）

訳：安田一边说着，一边到柜台去付账。

本研究は徐（2010）の用例を参考に、上例のような象声詞、形容詞、副詞や他の品詞を使用せず、擬音語の後に付く動作のみを翻訳する用例を脱訳とする。

以上の割合から分かるように、象声詞訳が多いことが中国語訳の特徴である。そして、脱訳、あるいは翻訳されていない場合も存在することが分かった。

中国語訳に翻訳された象声詞訳の形式を表6にまとめる。

■表 6

	中国語訳
A	6
AA	2
AB	1
AABB	5
ABB	3
合計	17

上表から、中国語で翻訳された形態が分かった。以下、小説の中で現れた擬音語の訳例を見てみる。まず、象声詞に翻訳された訳例から見てみる。

a) 象声詞

① A 型

- そんなにドタドタ足音を立てなきゃ歩けないの？

除了这样“咚”，“咚”发出很大的脚步声外，没有办法走路吗？（选 p182）

② AA 型

- 「気の毒に……。いい人だったのに」夕子が呟いた。

“真可怜……。他是一个好人。”夕子喃喃地说。（选 p170）

③ AB 型

- ガチャンという音とともに、坑道は真っ暗になった。

随着“咔嚓”一声，坑道里顿时一片漆黑。（幽 p46）

④ AABB 型

- 娘がびっくりした顔で、おどおどと。

她露出惊慌的表情，结结巴巴地说。（选 p190）

- 「いえ……。それほどまでにしていただかなくても……」私はおずおずと言った。

“不……。不需要对我这样照顾……”我战战兢兢地说。（幽 p4）

⑤ ABB 型

- こっちはヘラヘラ笑っているばかり。

听到这些话我只有傻乎乎的笑。（选 p205）

- ニヤニヤしながら眺めている原田を極力無視して、私は渋々言われた通りに教壇へ上がった。

我尽量不理睬笑嘻嘻的原田，心不甘情不愿地走上讲台。（选 p182）

b) 副詞

- 一気に言って、ふうっと余った息を吐き出す。

说完，大大地吐了一口气。（幽 p4）

- 列車の音がどンドン近づいて来る。

从铁轨传来微微震动的声音。（幽 p31）

c) 形容詞

- それは、低い、すすり泣きの声だった。
那是极低微的啜泣声。(幽 p35)
- 話が終えると、どっと拍手が沸き上がった。
演讲完毕时，四周响起如雷的掌声。(选 p205)

d) 動詞

- 急いで猿ぐつわを外してやると、ふうっと息をついて…
我急忙取下塞在她嘴里的毛巾，她松了一口气。(幽 p46)

e) 慣用句

- ここはやっぱり、ずばりと言い出すべきだった。
刚才还是应该直截了当先说出来才对。(幽 p4)

f) 脱訳

- 私と原田刑事が、昨日とすっかり様子の変わってしまった構内で、昨日の建物を探してうろうろしていると、
我和原田刑事在景象与昨天完全不同的校园内，寻找发生时间的那栋建筑物时
(选 p177)

4.2. 日中両言語における擬音語の数量対照

擬音語は日本語にのみ表われるものではなく、世界のどの言語にも存在する。しかし量的に見れば、やはり日本語におけるそれは非常に多く、また日本語以外の言語では擬態語のほうが擬音語よりはるかに少ないようである。このような現象について、浅野鶴子(1978)は、次のように指摘している。

日本語では「歩く」という動詞一つにいろいろの擬音語・擬態語をつけて違った歩き方を表現するのに対し、英語では基本的な walk の他に plod, strut, waddle, shuffle, swagger など異なる動詞を使っている。

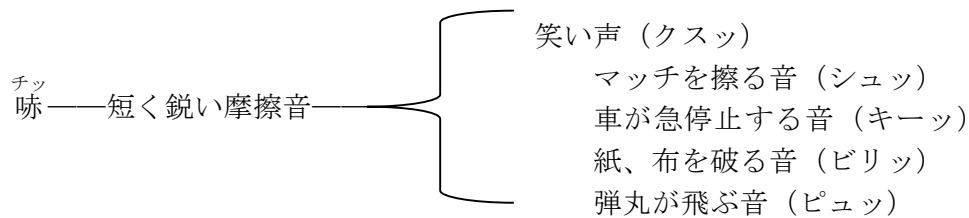
すなわち、一つの動詞に対して、我々は状況によりいくつかのオノマトペをつけて表現している。この種の動詞以外に、オノマトペの多いのは民族性にも深い関係があると考えられている。つまり日本人は音や状態、人間の心の変化を常に言い表わそうとする民族なので、オノマトペ表現が次第に発展してきたという説である。

日中両言語の擬音語を対照すると、瀬戸口律子(1987)は、「中国語の場合、動詞そのものがかなり細かいニュアンスを伝える機能を有するため、日本語のようにオノマトペに頼る必要がなかったわけである。この点が日中両国語の大きな相違点であると言える」と述べ、以下の用例を挙げている。

笑う	
にこにこ	笑眯眯
くすくす	窃笑
げたげた	狂笑
にたにた	傻笑
からから	哈哈(地)

つまり、日本語の動詞は中国語より概括的である。
それについて、野口宗親(1995: 20)は以下のように述べている：

中国語の擬音語は日本語のそれと較べると、かなり大まかで包括的な傾向がある。一つの擬音語が、



のように幾つかの近似の音を表すことも多い。… (中略) …一方、ライターをつける音は中国語で「咔嚓^{カチャ}」と言うが、これは日本語では「カシャッ、カチャッ、カチリ、カチン」など、破擦の有無、拗音 (シャ)、促音 (カチャッ)、撥音 (カチン) によって微細な音の状況を区別する。… (中略) …中国語では使用される音や音節あるいは組み合わせが限られるし、濁音の少なく、促音、拗音のような微妙な音の区別をするものがあまりない。

それについて、瀬戸口 (1984) は実例を挙げて対照している。

a) 咚咚：

- 心臓がだっだつと激しく打っているのが聞こえる。
- お祭りの太鼓の音がどんどんと響きわたる。
- 足音も荒々しくどしどしと二階へ上がって行ってしまいました。

b) 哗哗

- この雨はもう一週間もびしょびしょ降っている。
- 気温が上がると松の枝の雪がどさどさ落ちてうず高く積もった。
- ふたを開けて、セロハン紙をピリピリ破ってチョコレートを取り出す。

上記の例から見ると、日本語の擬音語が音声の微妙な差を細分化してデリケートに使い分けているのに対し、中国語の擬音語はそれらを大まかにとらえて事足りていることが分かる。つまり、先行研究のとおり、中国語の場合は一つの擬音語でそれに対応する日本語の擬音語数種をカバーする訳である。

しかし、中国語は破擦の有無により、微細な差異が色々あると思う。例えば：^{トン}噸と^{ドン}咚のような差異である。そして、現代中国語では、濁音が存在していないから (注：中国語の場合は「有気音」と言う)、中国語の擬音語が少ない原因になれないと考える。そして、音の数量から見ると、日本語は「五十音」というくらい、発音の種類は多くないが、中国語の発音は約 370 通りの発音がある (付録 1)。さらにそれぞれに 4 種類の「声調」というアクセントが付くので、 $370 \times 4 = \text{約 } 1480$ パターンの発音の組み合わせがあると考ええる。(注：ただし、すべてが四つの声調を付くとは限らないので、1000 パターンとは考えられる。) また、声調を間違えると意味が変わってしまう語もたくさんある。だから、中国語の擬音語が少ない原因は、中国語では使用される音が少ない、濁音が少ないとは言えないと思う。

それでは、なぜ中国語の擬音語が少ないのだろう。

一つは、中国語が日本語より音節が長く、声帯の振動が日本語より遅くなるからだと思われる。例えば、母音の付いた“ba” (八) と“pa” (趴) の音節を例に考える。

日本語の「バ」と「パ」に聞こえるかもしれないが、発音の仕方により微妙な違いがある。“ba”と“pa”、「バ」と「パ」の音の出方のイメージを記号で書いて見ると：

(両唇破裂を p、息をく、声帯振動を で表す)

ba (ハ) : [pa]

ba (ば) : [pa]

pa (趴) : [p<<<u>a]

pa (ぱ) : [p<<u>a]

中国語の場合では、無気音“b”は少量の息で唇の閉鎖を開放した後、即座に母音“a”が出る。一方、有気音“p”は大量の息で閉鎖を開放する。そのため、開放のあともしばらく息の放出が続き、やや遅れて母音“a”が発せられることになる。

だから、一定時間に発音できる音の組み合わせが少ないと考える。

もう一つは、中国語には、日本語のように、「っ」や「ん」のような促音と撥音がないから、単語を組み合わせるときの選択がより少ないと思う。上記の二点から、中国語の擬音語が確かに種類や数量が少ないと言える。

5. アンケート

中国人の日本語学習者を対象として、擬音語の学習について、アンケートを行った。このアンケート調査を通じて、擬音語を勉強する上での問題点を明らかにしたい。また、中国人の日本語学習者たちは、日中両言語の擬音語における差異についてどう考えているのか、知りたいと思う。アンケート調査をインターネットで配布し、今まで52名から回答を回収した。

アンケート調査の内容と結果は下表の通り：

問	問の内容	選択	人数	%
1	あなたは今とった日本語能力試験のレベルは？	N1	36	69.2
		N2	8	15.4
		N3	8	15.4
2	あなたは中国語を話す/書くとき、擬音語を使えますか？	よく使える	12	23.1
		時々使える	40	76.9
		どちらとも	0	0
		あまり使わない	0	0
		全然使わない	0	0
3	あなたは日本語を勉強している間、わざわざ擬音語を勉強しますか？	特別に勉強して、記憶します	28	53.9
		特別に勉強したことはないけど、普段の会話で積み重ねる	24	46.2
		勉強しない	0	0
4	あなたは日本語を勉強している間、どこで擬音語に出会いますか？	日常交流の間	48	92.3
		日本のテレビ番組/ドラマで	52	100
		日本語の本で	16	30.8
		先生の授業で	28	53.9
		見たことはない	0	0
5	あなたにとって、日本語の擬音語を難しいと思いますか？	たいへん難しい	8	15.4
		やや難しい	32	61.5
		どちらとも	12	23.1
		やや易い	0	0

		たいへん易い	0	0
6	日本語の擬音語はどのような点が難しいと思いますか	意味	20	38.5
		文法・使い方	28	53.9
		発音	16	30.8
		中国語の擬音語と違いところ	28	53.9
		いい本/教科書がない	8	15.4
7	あなたにとって、日中両国語の擬音語は異なる点はどこですか？	中国語より、日本語の数量が多い	28	53.9
		日本語の擬音語の発音が中国語と違う	24	46.2
		日本語の方がもっと頻繁的	32	61.5
8	擬音語の学習は大切だと思いますか？	とても大切	20	38.5
		やや大切	28	53.9
		どちらとも	4	7.7
		あまり大切ではない	0	0
		まったく大切ではない	0	0
9	どうして大切だと思いますか？	1. 日本人の話を聴き取りやすいため 2. もっと自然に日本人と交流できる 3. もっと簡単に伝える 4. 生き生きしている		

このアンケートから、以下のことが分かった。

1. 中国人は日本人のように頻繁に擬音語を使うわけではない。
2. 日本語を勉強している間、擬音語によく出会った。
3. 文法、使い方が難しいと思う人が一番多かった。
4. 中国人の日本語学習者は、日中両言語の擬音語の違いとして日本語の擬音語は「数量が多い」、「もっと頻繁に」と答えた人が多かった。
5. 中国人の日本語学習者は、擬音語の学習が不可欠だと考え、工夫をして勉強している。

おわりに

本研究を通して、日中両言語の擬音語について習得した。今まで言語学について何も勉強したことなかった私にとって、貴重な経験になった。本研究では、日中両言語の擬音語の形態、特徴、音と意味のつながり、翻訳方法、用法、学習者の現状から、対照研究した。

まず、擬音語の形態について、どちらも音節によって分けられる。そして、最も一般的な形態は重複形であることだと分かった。しかし、中国語では、漢字の一つ一つが意味を持っている文字であり、部首の意味を無視して漢字を使うわけにはいかない。だから、中国語にない発音は、擬音語になれないのは当然だが、その上、形と意味の制限があり、選ばれる漢字はより少ない。一方、日本語の擬音語は聞こえた音や声のまま擬音語を造るわけであり、より自由度が高く、数量も多い。

今後、さらに検討する必要があると思われる点が下記のような、いくつかある。

1. 本研究では、擬音語の発音と意味のつながりを先行研究を参考しまとめたが、先行研究の結果を検証するため、さらに日中両国語の母語者にインタビューし、あるいはアンケートを行う必要があると思う。
2. 本研究では、「ところにより、雨」と「幽霊列車」二つの文章から擬音語を

見つけ、翻訳方法をまとめたが、用例がまだ足りないので、日本語－中国語の擬音語の翻訳方法を未だに明らかにしていないと思う。

3. 中国語の擬音語は、日本語と比べると確かに少ないと考えるが、豊富な擬音語があるのは日本語の特徴だから、また別の言語とさらに比較してみないと、中国語の擬音語が少ないかどうかは分からない。

本研究を通して、これからの日本語の勉強としても、日中対照の研究としても、重要な一步を踏み出した。また、対照研究の初心者である私に対し、小川先生、石原先生、先生方から丁寧に指導してくださり、心からの感謝を申し上げたい。本稿の論述の中には誤りや不備な点もあったと思うので、是非諸先生方のご指教を頂きたい。

参考文献：

- 浅野鶴子・金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』、角川書店
- 天沼寧（1984）『擬音語・擬態語辞典』、東京堂出版
- 王湘榕（2012）「日中両国語における擬音語の対照研究－小説『ノルウェイの森』とその三種の中国語訳本を中心に－」お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科『人間文化創成科学論議』第15巻
- 呉川（2005）『オノマトペを中心とした日中対照言語研究』、白帝社
- 徐一平（1981）「日本語の擬音語・擬態語の総合研究（上）」『中国語研究』第21号
- 徐一平 譙燕 呉川 施建军（2010）『日語拟声拟态词研究 日本語の擬音語・擬態語に関する研究』学苑出版社
- 瀬戸口律子（1984）「擬音語・擬態語表現（日本語－中国語）について」『大東文化大学紀要人文科学』第22号
- 瀬戸口律子（1987）「擬音語・擬態語研究のいくつかの問題点」『大東文化大学紀要人文科学』第25号
- 田守育啓（2002）『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』、岩波書店
- 丹野真智俊（2005）『オノマトペ（擬音語・擬態語）を考える－日本語音損の心理学的研究』、あいり出版
- 野口宗親（1995）『中国語擬音語辞典』、東方書店

引用文献：

- 原文：赤川次郎「ところにより、雨」（『幽霊列車』所収）文春文庫、1981
「幽霊列車」（『幽霊列車』所収）文春文庫、1981

- 訳本：静波 译〈选地方下雨〉（《幽灵列车》所収）、南海出版公司、1991
〈幽灵列车〉（《幽灵列车》所収）、南海出版公司、1991